

品目共通的な生産資材費縮減策について

1 経営面からみた縮減策

生産資材の縮減に取り組み経営の安定化を図るためには、再生産価格を算出することで有効な情報が得られる。再生産価格とは 物財費、出荷経費、労働費の合計額を出荷数量で除した金額で、取引価格と比較することで利益が算出できる。 の物財費については周到な栽培管理に努めることで、無駄な資材を使わない、安価な資材への切り替え、資材使用量の見直し、新技術の導入による経費の削減等に徹底的に取り組む必要がある。また経費の中で大きな割合を占める農機具費の削減には、保守点検の徹底による利用期限の延長、経営規模に見合う機械導入、共同利用による利用率の向上等を進めることも必要である。 の出荷経費は出荷資材費や出荷手数料等の削減策を、 の労働費では省力化技術の導入や機械導入による省力化に取り組む必要がある。

(1) 経費削減の考え方

$$\text{農業所得} = (\text{単価} \times \text{数量} - \text{経費}) \times \text{面積}$$

重油や肥料等の資材高騰の厳しい経営条件下では経営者の判断は経営成果を大きく左右することになるため、上記の農業所得の構成要素を再確認する必要がある。農業所得を伸ばすには、単価アップ 数量アップ 経費削減、規模拡大の4つの視点から対策を立てることが大切である。これを踏まえて図 -1-1 に示したように経費削減するための4つの取り組み(物財費削減、出荷経費削減、労働費削減、規模拡大)について以下のとおり整理した。

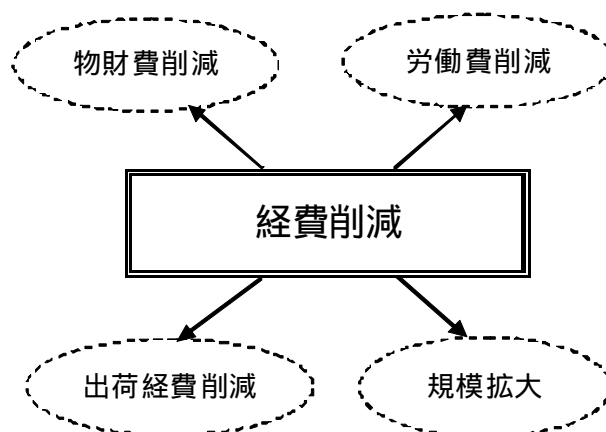


図 -1-1 経費削減の視点

物財費の削減

図 -1-2 は物財費の削減方策について特に肥料費や農薬費、光熱動力費について表したが、基本的な考え方は 購入単価の引き下げと 使用数量の削減の2つである。

肥料費の削減では、土壌診断にもとづく適正施用量の投入や堆きゅう肥の有効利用、側条施肥や局所施肥等の導入、低価格肥料の利用等が考えられる。また予約や大口注文、共同購入は安価購入に有効である。農薬費については、防虫ネットの設置や発生予察情報にもとづく適切な薬剤散布、虫害忌避資材の施用等が上げられる。

次に動力光熱費の削減では、ハウスの機密性を高めることや暖房機の点検・整備、多層カーテンや空気膜フィルムの利用、多段階サーモの導入によるきめ細かな暖房機の利用、ヒートポンプ等の新技術の導入等が上げられる。

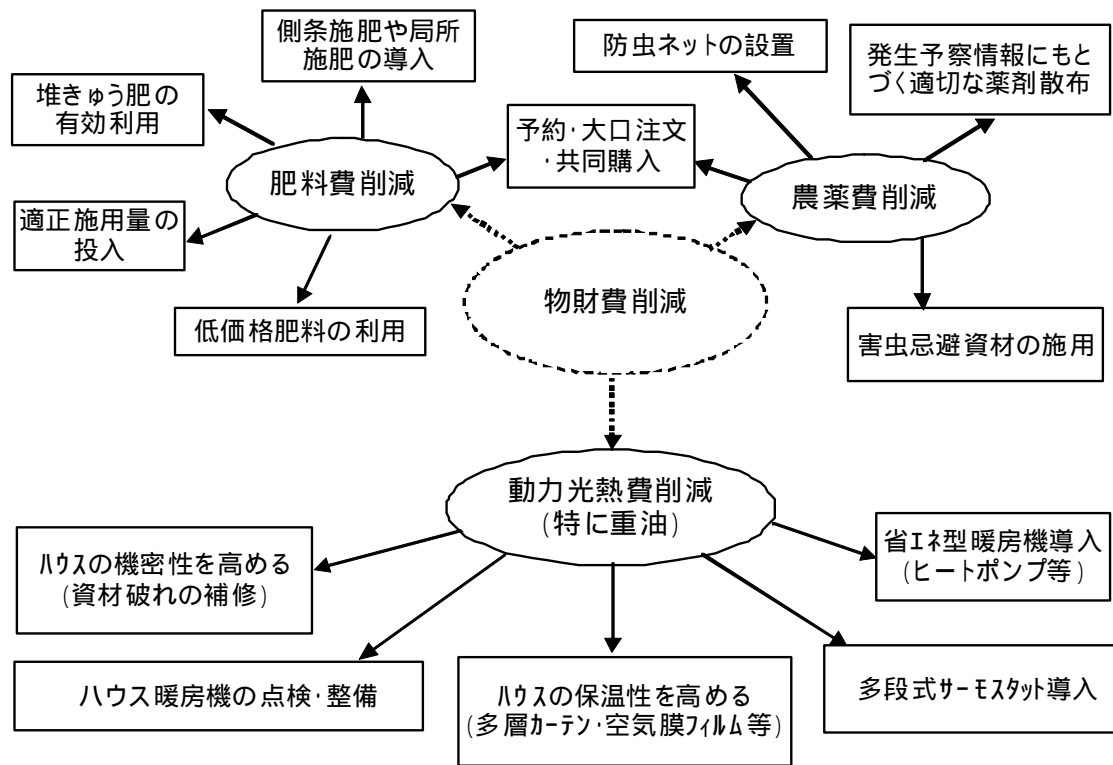


図 -1-2 物財費の削減

また図 -1-3 は経費の中で大きな割合を占める農機具費の削減方策について示した。農機具費を削減するには保守点検の励行による利用期限の延長や中古機械の活用、過剰投資を防止するための経営面積に応じた機械導入、機械の共同利用等が上げられる。

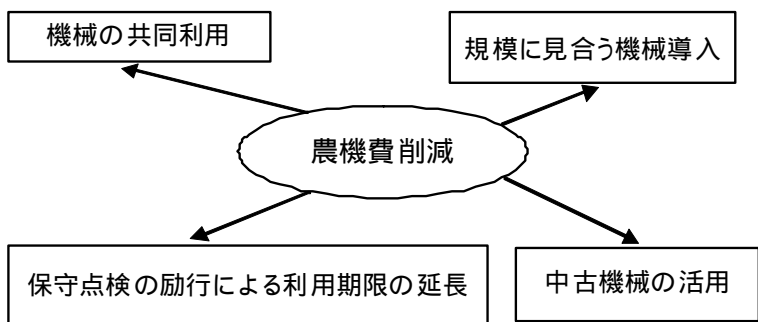


図 -1-3 農機具費の削減

集落営農組合を設立して過剰投資を抑えた事例を表

-1-1 及び表 1-1-2 に示した。この表から 150 ㌦の個人経営で水田関係の機械を導入した場合には減価償却費は年間 1,365,000 円であるのに対して、農家 30 戸で水稻作付面積 4,500 ㌦の規模で機械を共同で導入した場合には 1 戸当たりの減価償却費は 450,000 円に縮減できる。つまり個人よりも共同で機械導入した結果、経費の減価償却費が 915,000 円削減できることになり、結果的に農業所得は 915,000 円高まることになる。

表 -1-1 個人経営の機械所有及び減価償却費

機械	性能	台数	取得価格	耐用年数	減価償却費	合計
トラクター	24ps	1	2,800,000	8	315,000	1,395,000
乗用田植機	5条	1	2,000,000	5	360,000	
コンバイン	2条刈	1	4,000,000	5	720,000	
作付面積	1戸当たり減価償却費					
150	1,395,000					

表 -1-2 共同利用の機械所有及び減価償却費

機械	性能	台数	取得価格	耐用年数	減価償却費	合計
トラクター	50ps	3	24,000,000	8	2,700,000	13,500,000
乗用田植機	8条	3	12,000,000	5	2,160,000	
コンバイン	6条刈	4	48,000,000	5	8,640,000	
作付面積	農家数	1戸当たり減価償却費				
4,500	30	450,000				

出荷経費の削減

出荷経費の削減方策として図-1-4に示した。出荷資材の削減には通いコンテナの導入、出荷手数料の削減には直売や直接販売等に転換することが考えられるが、販売先の確保や継続的な取引等の問題があり容易ではない。

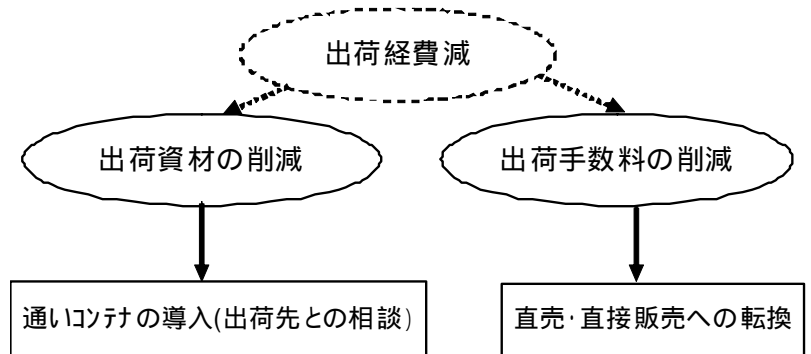


図 -1-4 出荷経費の削減

労働費の削減

労働時間を削減するには、機械化による労働時間の縮減や水稻等の直播栽培の導入、集落営農組合等による作業の共同化等が上げられる。表-1-3では0.5~1.0畝と15畝との労働時間と労働費が示されているが、労働時間で23.58時間、労働費では3,269円の差があり規模拡大により作業効率が向上し大幅に労働費が削減される。

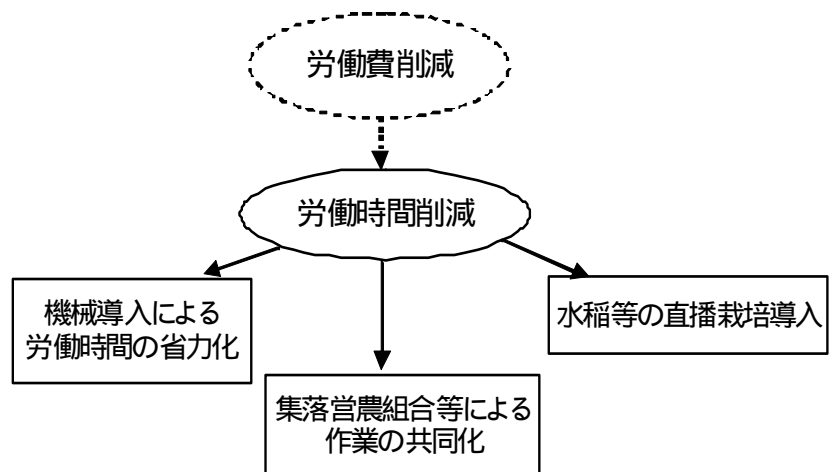


図 -1-5 労働費の削減

規模拡大

規模拡大によりコスト削減に寄与した事例を前述で用いた表 -1-3 で示す。0.5～1.0畝では 60 ㎡当たりの生産費は 20,434 円と高く 15畝以上の規模では 8,591 円と低水準である。つまり規模拡大によ

表 -1-3 水稻の規模別生産費の比較 (円/60㎡・hr/10畝)

規模	0.5～1.0畝	15畝～
生産費 (副産物除く)	20,434	8,591
肥料費	996	835
農薬費	846	627
農機具費	3,424	1,829
労働費	6,066	2,797
労働時間	36.48	12.9

り高性能の機械・施設の導入や農作業の効率化により、資材の節減（肥料費 161 円、農薬費 219 円等）や労働時間の省力化（23.58hr/10畝）により労働費 3,269 円の削減につながる。また、施設園芸では年間 2 作から 3 作へ増やすことでハウスの利用率が高まり、1 作当たりの農用建物（園芸施設費）の減価償却費は 2/3 へ低下し経費削減につながる。

(2) 再生産価格

再生産価格の仕組み

いくらで売ればいくらのもうけが出るのかを把握できる経営指標に「再生産価格」がある。この指標は経費削減の糸口になる貴重な情報を得ることができるため資材高騰の対策にも利活用できる。再生産価格は図 -2-1 のとおり、労賃と出荷経費、物財費の合計である総原価を出荷数量で除した金額である。

事例は秋レタスの再生産価格を求めたものであり、労賃 1,500 円/時間、出荷数量 3,000 ㎡という前提で試算した結果、再生産価格は 157 円/㎡と計算され、取引価格 160 円/㎡と比較することで利益 3 円/㎡が算出される。

仮に肥料や諸材料等の価格上昇により再生産価格が 176 円/㎡に高まった場合には、取引価格 160 円/㎡と比較して 16 円/㎡の赤字に陥る。10畝当たりでは 48,000 円（16 円/㎡×3,000 ㎡/10畝）の赤字である。

この赤字を解消するには、物財費や出荷経費から 48,000 円/10畝を削減する、出荷数量を 30 ケース/10畝増加させて販売金額 48,000 円/10畝を増収する（48,000 円/10畝÷160 円/㎡=300 ㎡/10畝 300 ㎡/10畝÷10 ㎡/ケース=30 ケース/10畝）、又は と の組み合わせで対応するかの 3 つの方策が考えられる。経営の状況により取り組むべき方策は異なるが、再生産価格を求めることで貴重な情報が得られるため資材高騰の対応に有効に利活用できる。

以上のように再生産価格を算出することは、肥料、光熱動力費等の物財費や出荷経費、労働費を全て洗い出して、削減すべきものがないかどうか十分に検討する判断材料になるため利活用を図りたいものである。

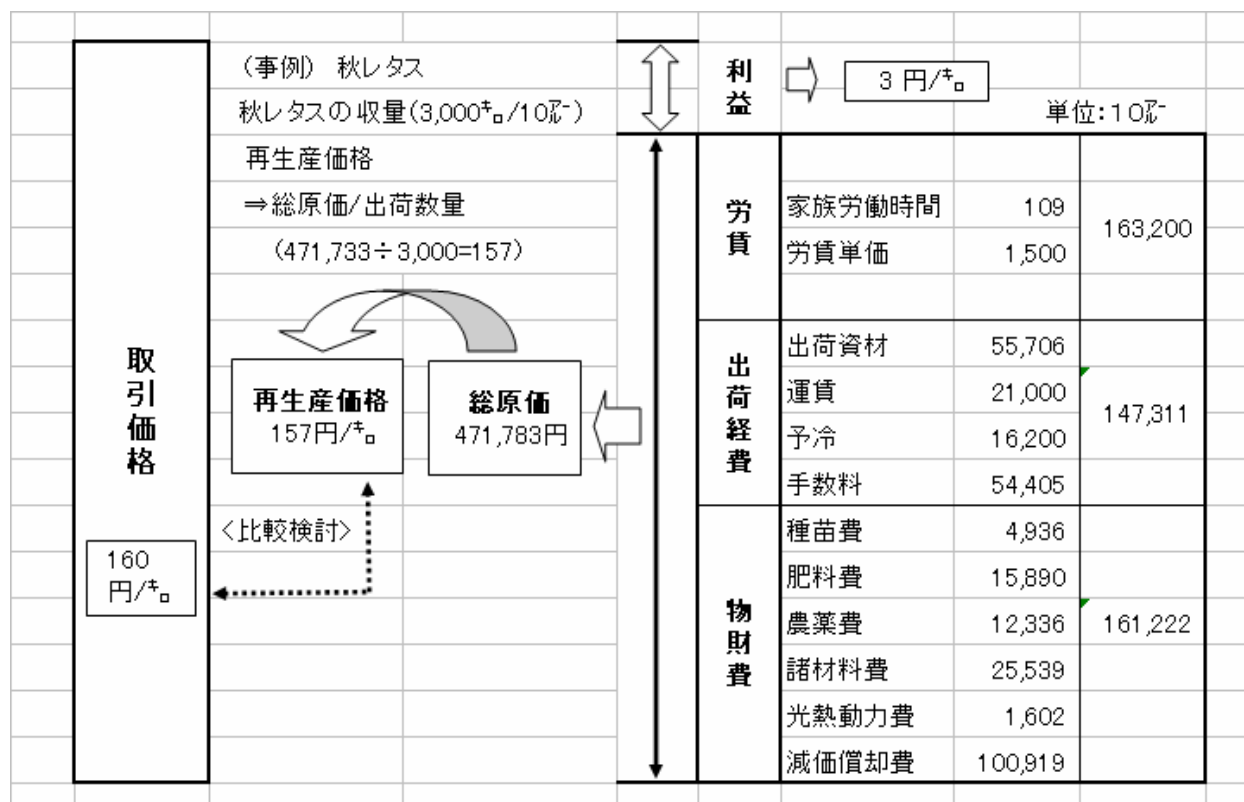


図 -2-1 再生産価格の仕組み

再生産価格の活用事例

表 -2-1 は各作物の再生産価格の一覧表であり、JA・生産部会の協力のもと普及センターが作成したものである。この生産部会では再生産価格算定及び利活用の取り組みは本年度で2年目である。資材高騰の影響を見るため各作物別に H18 年、H20 年、「今後」の3つの期間について再生産価格を試算したものである。「今後」とは、平成20年後半以降に肥料費や農薬費、出荷資材、運賃等の値上分を加味して試算したものである。

例えばホウレンソウの H18、H20、今後の再生産価格は、155.7 円、159.2 円、171.3 円と資材高騰の影響により徐々に上昇していることが明らかである。

この生産部会では資材高騰の影響を正確に金額で把握して、この再生産価格を出荷先に情報として提供して野菜経営の困窮を訴えて取引価格の交渉に役立てているとのことで、再生産価格が有効に活用されている事例である。

表 -2-1 作物別の再生産価格

区分	再生産価格(円/kg)		
	H18	H20	今後
ホウレンソウ	155.7	159.2	171.3
レタス	137.0	142.5	157.3
キュウリ(春)	148.2	149.5	155.5
キュウリ(秋)	174.6	176.7	184.9
小松菜	134.8	137.7	145.4
ジュガイモ	85.2	87.1	93.9
ピーマン	158.2	159.4	165.2
ニンジン(春)	130.6	138.1	141.8
ニンジン(秋)	139.0	141.5	151.8
トマト	197.7	207.4	229.1
大根(秋)	123.9	125.7	133.1
大根(春)	147.1	149.5	158.3